

博士学位申請論文審査報告要旨

2021年5月31日

申請者 橋本 智弘 (LD121011)
論文題目 National Consciousness and Critical Cartography in the Works of Salman Rushdie, Kiran Desai, and Michelle Cliff
論文審査委員 中井 亜佐子
三原 芳秋
河野 真太郎 (専修大学 教授)

1. 本論文の内容と構成

本博士学位請求論文は、1980年代以降の英語圏ポストコロニアル文学において「ナショナルな意識」の再創造がいまだ重要な主題であることを、サルマン・ラシュディ (ルシュディ)、キラン・デサイ、ミシェル・クリフという3人の英語作家の小説を分析することによって論証しようとするものである。小説テキストの内在的読解に加えてポストコロニアル文化理論の再読を行い、とくに1990年代以降のグローバリゼーション文化研究におけるポストナショナリズムの潮流に異を唱え、世界システムの周縁における「ネーション」の創造プロセスとしてのナショナリズムを再評価することも、本論文のもう一つの企図である。

論文は英語により執筆され、A4判(28行/頁)113頁から成り、構成は以下のようなものである。

Table of Contents

Introduction: Postnationalist Discourses and Peripheral Literatures

Postnationalism and the Concept of Culture

Uneven Development and Nationalism

Franz Fanon's Revolutionary Cartography

Chapter Summaries

Chapter 1: Narrative Strategies to Represent the Nation in Salman Rushdie's *Midnight's Children*

Midnight Children's Conference as an Alternative Public Sphere

Affiliation, Communalism, and State Power

Self-Reflexivity and Infinite Reproduction of Affiliation

Chapter 2: Magic Realism and Hybridity in Salman Rushdie's *The Satanic Verses*

Rewiring Englishness

Hybridity as Postcolonial Strategy

Chapter 3: Landscapes and Perceptions of Nature in Kiran Desai's *The Inheritance of Loss*

The Chronotope of the Periphery
Collapsing Landscapes
From Landscape to Soundscape
Chapter 4: “Ruin Landscape” in Michelle Cliff’s No Telephone to Heaven
Ruin Landscape and Matrilineal Ancestry
The Predicament under the Tourism Industry
Beyond Anthropomorphism
Conclusion
Works Cited

2. 本論文の概要

政治的ないし文化的カテゴリとしての「ネーション」は近代における集合性の基本単位であり、人びとはネーションに依拠することによって強い連帯意識を醸成し、またネーションをつうじて自由と幸福を実現しようとしてきた。ナショナリズムに訴えることは、植民地解放の原動力でもあった。しかしながら、1980年代以降は商品の流通と人びとの移動がますますグローバル化するにつれて、ネーションが分析枠としてすでに機能していないとみなす、いわゆる「ポストナショナリズム」言説が文化理論を席卷してきたと、本論文は指摘する。そして、こうした状況判断のもとに本論文は、1980年代以降の英語で執筆するポストコロニアル作家たちが、作品をつうじてオルタナティブな「ナショナルな意識 (national consciousness)」を生みだしていると主張し、サルマン・ラシュディ、キラン・デサイ、ミシェル・クリフの3人の作家の小説の読解をつうじて論証を試みる。本論文によれば、これらの小説はネーションの概念を脱自然化しその構築性を示唆しつつ、グローバル化による不均等発展が世界システムの周縁に生みだすあらたな「ナショナルな意識」の可能性を追究している。タイトルにある「批判的地図製作 (critical cartography)」は、人間主体を政治経済的な背景と関係づけて知覚するというポストコロニアル文学の想像的な営みを表現する用語として用いられている。

序論ではまず、ネーションおよびナショナリズムにかんする問題系を整理することによって、本論文の軸となる理論構築を行っている。本論文の指摘によれば、1990年代以降のグローバリゼーション文化研究はカルチュラル・フローを国境によって閉じ込めることはできないと主張し、ポストコロニアル批評は文化の問題を焦点化するあまり、グローバル化の物質的な側面を無視する傾向にあった。こうした研究および批評の動向を整理したうえで、本論文では脱植民地化ナショナリズムの思想家としてのフランツ・ファノンを経典として採用している。ファノンは植民地解放戦争において農民大衆が主体的にナショナルな意識を構築するプロセスを肯定的に記述したが、本論文ではこのようなネーションのパフォーマティブな側面に着目して、第1章以降では具体的な作品読解を行っている。

第1章ではインド出身の作家サルマン・ラシュディの『真夜中の子どもたち』(1981年)を取り上げられ、「小説」というフォーマットがネーションという集合性の感覚の形成にどのように貢献しているかが

考察されている。小説の主人公サリームは、インド独立の日に誕生した国中の子どもたちをテレパシー能力によって集めることによって、新しい公共圏をつくらうと試みる。だが、出生の時間の偶然の一致のみによって結びつけられた子どもたちは、あまりに多様なイデオロギー的指向をもっていることがあきらかになり、とくにサリームとシヴァの対立は、異種混濁的なものの統合を目指す「ブルジョワ」観念主義と、階級的分断こそが問題だとする唯物主義のあいだのイデオロギー対立に発展する。だが、両者は単純に対立するのではなく、複雑な家族関係(シヴァはサリームと同じ日に同じ病院で生まれ、取り換えられて互いに逆の経済環境で生育した)によって結びつけられている。両者のあいだの弁証法のプロセスは、小説の自己省察的な物語構造をつうじて、物語の時間枠を超えて維持されていると、本章は結論づけられている。

第2章では、ラシュディのもっとも論争的な作品である『悪魔の詩』(1988年)の読解をつうじて、移住の経験によってナショナルな想像力がどのように変容していくのかが検討されている。「マジックリアリズム」と「雑種性」はラシュディの作風を言い表す際によく使われる用語であり、ポストコロニアル文学の政治的戦略として賞賛されてきたが、同時に商品化されたグローバル文学の特徴として批判もされてきた。『悪魔の詩』は一見してこうした批判にあてはまる作品であるが、本論文はむしろ、こうした文学的特徴をポストコロニアルな集合的生との相互作用において再評価しようと試みている。『悪魔の詩』ではロンドンを舞台にした「現実」の物語と、主要登場人物の一人、インドの俳優ジブリール・ファリシュタがみる「夢」の物語(イスラム冒涇とされた予言者をめぐる物語はこちらに含まれる)が交互に語られるが、本論文はとくにロンドンでの物語に焦点を当て、もう一人の主要登場人物、インド移民サラディン・チャムチャをめぐる物語を詳細に読解し、チャムチャの物語にはサッチャリズムのもとでのグロテスクなレイシズムを暴き出すとともに、雑種性からあらたに「ナショナルな統合」を導く希望がこめられていると結論している。

第3章以降では、エコクリティシズムの知見を取り入れつつ、周縁地域から「批判的地図製作」を実践する小説作品が分析されている。第3章では、インド出身の現代作家キラン・デサイの『喪失の響き』(2006年)が論じられる。この小説の主な舞台である西ベンガル地方の山岳地帯の町カリンポンは植民地時代に避暑地として開発された地域だが、小説の現在時では自治権を求めるグルカ人のナショナリズム運動によって混乱状態にある。二人の主要登場人物のうち、ビジュはニューヨークに不法滞在する移民労働者、サイは英国化した富裕層であるが、本論文はそうした社会階層の異なる登場人物たちによる土地の風景の知覚の差異、そして両者が階層の違いにかかわらず同じ視点を共有する可能性に注目している。小説が提示する地理学は「カウンター・ランドスケイピング」という用語で説明されているが、それは植民者の思い描くヒマラヤのイメージの脱自然化であるとともに、現代のグローバル化がもたらした経済格差を批判的に分析するものでもであると、本論文は主張する。また、本論文の指摘によれば、グルカ・ナショナリズムは小説中ではアイロニカルに言及されており、ナショナリズムのディレンマとして和解不能なままであるという暗示とともに、物語は終わっている。

第4章では、ジャマイカ系アメリカ人作家、ミシェル・クリフの半自伝的小説 *No Telephone to Heaven* (1987年、未訳)が取り上げられ、エドワード・サイードが提唱した反植民地的想像力におけ

る「地図製作的な衝動」という概念に示唆を得て、この小説における「廃墟化した」風景が考察されている。主人公クレア・サヴェジはジャマイカのクレオール女性で、当初はジャマイカの人種的ヒエラルキーを受け入れていたが、旧宗主国イギリスへの留学を経て、プランテーションによる植民地主義と観光産業による新植民地主義への批判的視座を獲得する。亡くなった母親のメッセージに触発され、クレアはジャマイカの貧しい大衆に近づくことを望み、観光産業とは異なるかたちで自然を理解しようとする。武装革命集団に加わったクレアが銃撃によって倒れて言葉を失ったのち、持続する自然の生命力が擬音語で表象されている小説の最終場面を分析して、小説がオルタナティブな自然を創造しているのだと本論文は結論づけている。

結論において本論文は、「世界文学」をめぐる今日の議論に言及し、世界文学論が文学作品のグローバルな拡散、流通に注目することによってローカルなナショナリズムにかかわる問題を重視していないと指摘している。そして、世界文学論に欠けている視点として、文学には世界を変革する力が潜在すること、そうした力がしばしばナショナルな意識として結晶化していること、ポストコロニアル文学が現状を打破しようとする目標において、20 世紀の脱植民地化ナショナリズムの潮流に連なることが再確認されている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、英語圏ポストコロニアル文学を「ナショナルな意識」の再創造という観点から再評価した点にある。商品化されたポストモダン文学、グローバル・エリートの文学などといった批判は、ラシュディをはじめとする多くの英語作家に向けられてきた。しかし本論文は、そうした批判に反論し、ポストコロニアル文学、とくに「小説」というジャンルが、グローバル化による不均等発展から生まれた「周縁のナショナリズム」という問いに応答しつつ、ネーションのあらたな可能性を模索しているという主張を、具体的な作品の読解をつうじて論証することに、かなりの程度成功している。

第二に、1990 年代以降 2000 年代までの文化理論・ポストコロニアル批評の動向をわかりやすく整理し、そのうえで本論文の理論枠をファンンの脱植民地化ナショナリズムに定めた点にある。また、本論文は高度に理論的な用語を駆使した明瞭な英語で書かれており、きわめて明晰な論理展開で議論が進められている。先行研究への批判的立場を明確に打ち出すことによって反論も招きやすくなるが、そうしたリスクを引き受ける論争的な姿勢は、本論文が研究論文でありつつ批評としての側面を備えていることを示している。後半 2 章でエコクリティシズムの観点を取り入れたことも、ナショナリズム論としての本論文の独自性として評価できる。

第三に、具体的な小説作品を読み解き、オリジナルな解釈をほどこした点にある。本論文で扱われる小説のうち、デサイとクリフは日本ではそれほど知られているとはいえ、ラシュディは有名ではあるが作品はいずれも長大で難解であり、『悪魔の詩』も実際に読んでいる人は非常に少ない。近代文学、とくに小説が政治的力を失ったと言われるだけでなく、そもそも長い小説を読むこと自体が忌諱されがちな現代にあつて、現代社会における小説の可能性を追究しようとする愚直な努力においても、本論文は評価されるべきである。

しかし、本論文にも、いくつかの点で問題がないわけではない。まず第一に、グローバリゼーションに対抗する「ナショナルな意識」を肯定的に評価しようとするあまり、その負の側面が見過ごされがちである。ファノンの脱植民地化ナショナリズムの「ネーションになる」プロセスにおける暴力の問題、あるいはネーション形成後に国家権力化するときの暴力の問題は、もう少し丁寧に考察されるべきであった。また、『悪魔の詩』では宗教がネーションに代わる(あるいは補完する)結合力として表象されているが、本論文ではほとんど取り上げられていない。周縁のナショナリズムを 1980 年代以降の問いとして思考するのであれば、宗教の問題は無視できないと考えられる。

第二に、本論文は論の展開として一般化の傾向が強く、最初に提示された概念の傍証としてテキスト読解がなされているきらいがある。そのような概念のナラティブをときとして内破するような、個々のテキストの読解があってもよかったと思われる。一方では「不均等発展」へのマテリアリストな配慮を論文の独自性として掲げながら、「ナショナルな意識」の展開にはきわめてヘーゲル的な構図を無批判に前提としているため、地域・出自・ジェンダー/セクシュアリティなどあらゆる意味で異質な複数の作家の作品を扱いながら、それらの作家のあいだにある「不均等」が一般的な概念に回収されてしまうきらいがある。また、「英語圏ポストコロニアル文学」の範例としてこの 3 人の作家による 4 作の小説が選ばれていることについて、選択の根拠を示してほしかった。

第三に、論の明晰さを求めるあまり、批判対象となる先行研究をやや単純化しすぎる傾向がある。たとえば、「不均等発展」の概念を詳述する際に参照されるトム・ネアンの *The Break-up of Britain* (1977 年、未訳) はもともと英国内の地域ナショナリズムを主題としていたが、本論文ではそれをマルクス主義なナショナリズムの代表例として扱うことによって、ナショナリズム論の核になる個別性を裏切っているように思われる。「ナショナリズムが近年等閑視されている」という前提についても、実際には 2001 年の米国同時多発テロ以降 2010 年代の米国トランプ政権、英国のブレグジットにいたる社会背景のもと、英語圏のナショナリズム論はむしろ活発になってきたという、より近年の言説状況を考慮する必要があるだろう。

しかしながら、これらの問題点は、けっして本論文が達成した成果の大きさを損なうものではない。これらの指摘にたいして(批判的に)応答することをつうじて、本論文のプロジェクトがより広い視野のもとに継続され、完成することを期待したい。

4. 結論

以上の所見により、審査員一同は本論文が独創性に富むすぐれた論文であり、当該分野の研究に十分に寄与したと認め、一橋大学博士(学術)の学位を授与するのが適当であると考えます。

最終試験結果報告

2021年5月31日

受験者	橋本 智弘 (LD121011)
最終試験委員	中井 亜佐子
	三原 芳秋
	河野 真太郎
	(専修大学 教授)

2021年5月29日、橋本智弘氏の学位請求論文“National Consciousness and Critical Cartography in the Works of Salman Rushdie, Kiran Desai, and Michelle Cliff”について、本学学位規則に定められるところの最終試験を実施した。

試験において、提出論文に関する問題点および関連分野についての質疑を行ない、説明を求めたのに対して、橋本智弘氏は適切な説明を以って応えた。

よって審査委員一同は、橋本智弘氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。